

奈良基督教会には現在、3つのグループがあります。総務グループと宣教グループ、そして典礼グループです。なぜ「礼拝グループ」ではないのか、赴任した当初は疑問に思っていました。

というのも「典礼」という言葉はローマカトリック教会で多く用いられるもので、聖公会を含むプロテスタント教会ではあまり使われません。もともとのギリシア語の意味は、「公共の事業」や「公衆の名で公衆のためにおこなわれる奉仕」というものでしたが、それが「聖体祭儀」や「聖餐(ミサ)」をあらわすものとなりました。

「典礼」とは、特に定められた「典礼文」を用いておこなう儀式や儀礼を指すので、「祈禱書」の中の「(礼拝)式文」を用いて礼拝をおこなう聖公会においても、典礼的要素は強いのかもかもしれません。

しかし、例えば祈禱書の中にある「朝の祈り」を個人的におこなったとしても、それは「典礼」とは言えないようです。いわゆる「公禱(公の礼拝)」を指すものだそうです。

なお、聖書にはいくつか、初代教会時代には礼拝や信仰告白、賛美に用いられたと思われる言葉がいくつか見られます。

たとえば、「主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、『これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい』と言われました。(コリントの信徒への手紙一 11章 23～24節)」は聖餐式で用いられましたし、「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。(フィリピの信徒への手紙 2章 6～8節)」は信仰告白の言葉だったようです。これらの言葉を用い、典礼をおこなってきたのでしょう。

今回は「富」です。楽しみに。



「聖霊降臨を描いた15世紀の写本」
エル・グレコ

(1541～1614年)

こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

(フィリピの信徒への手紙 2章 10～11節)

